

きんぎょのまち

NO.28 月刊

昭和二十五年十月一日発行 (非売品)
発行所 岡山県瀬戸郡吉備町庭瀬七七 宇垣方
吉備 観光 協会

石津の貝塚

大内田の大字石津一三番地内にある。吉備町と福田村の境界になつて
いる三摩山の山裾にある。約十七平方米ばかりの地域で近年まで貝殻類
や矢じり、石族などの遺物を掘り出したことがあつたが、いまはその跡
形もなくなつてゐる。

貝塚といふは原始時代の住民が日常の生活を営み食用に供した貝殻や
他の食物や残りもの、不用になつた器物をここに捨てた捨揚場である。
少なくとも二千年以前に遡る時代にこの附近が北に面した海岸にレテ、
ここに安住の地を求めて棲息した人類が山中にかけ廻つて狩獵をことし
、家は海浜に濱傍して平和的な自然の生活を営んだ遺蹟である。

貝塚からは石器、土器、骨角器、魚骨、獸骨などが発見せられ又埋葬
した人骨などが発見せられる場合もある。これによつて古代の海岸線や
土地の状態、自然の環境、生活の様式などを知ることが出来て文化の編
年を研究する資料になる訳である。

この石津の起源は津は船舶の碇泊した海浜で轉じて渡レ場である。難
波津、大津のような湊港の意に解せられる。レカレレ山全体が巨岩であ
る處から出た言葉であらうと思はれる。前述のように地形上から推察し
て往昔は海岸の位置にあり撫川、庭瀬築成の時代にはここから盛んに石
材を採取して船に乘せ運搬せられたものである。庭瀬附近は新開地にレ
て石材が容易に得られなつたため他から搬入したものであるが、余が石津
採石説をなす理由は (一)陸路による適当な採石場がないこと。 (二)距離が

他の適地より遙かこと。 (三)船による運搬が容易であること。 (四)石津に
は巨岩を破砕したあとが歴然と認められること。などであつて現在使用
せられたい町家の敷石、或は城跡の石噴が石津産と同質なことによつ
て想像し得るのである。

坂本の貝塚

定坑から大内田に至る街道を突き当つて右に折れ約二百五十米のつた坂
本といふ所の山裾に貝塚がある。近年暮りに掘り荒さかしているが、往々
貝殻を発見することがある。

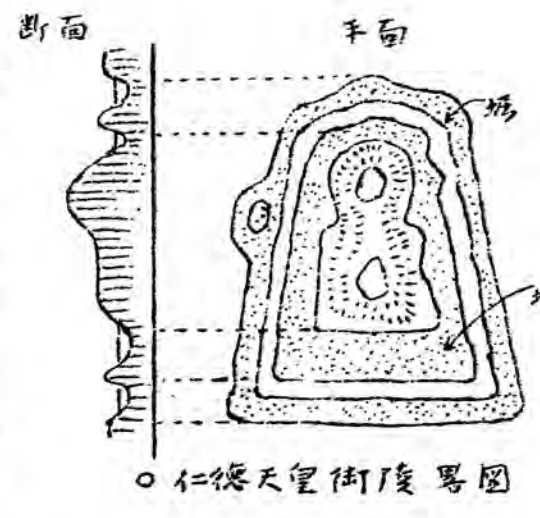
地形を案ずると西と東に山裾が流れて入江の状態になつてゐる。往古
海浜であつた北海岸に面してゐたことが想像せられる。先住民族がここ
に安住の地を定めて農耕生活を営んでゐたことが立証せられる。

天神山の古墳

御おに存在する古墳を紹介する前に古墳とはいかなるものかについでそ
の概念を説明して参考に供したい。
古墳は往昔、死者の遺骸を葬つた墓場であつて現在何々塚、或は河々
地(が)などの名をつけて遺さかしてゐる。そしてその構造をみるに孤立し
てゐる古墳には天然の丘陵を利用したもの、山腹を利用したもの、平地
に土盛りして大々的に基礎工事から着手してゐるものなどがある。又形
式も多種多様にわかれ居り、円墳、前方後円墳、方墳などである。そ
の遺構の内부를詳細にみると石棺又は陶棺、木棺に屍を納め岩石を積み
重ねて洞窟をつくり、そのなかに安置し、更にその納棺の周囲には生前
所持してゐた身廻品や種々な形をした須惠器の祭器などを置いてゐる。
これを副葬品といつてゐる。そして一方に出入口を設けて岩石で蓋を覆
ひ全部を土盛りして後世に遺してゐるのである。古墳の種類別にみると

堅穴式と横穴式があり、後者には玄室と羨道とが區別してゐる。又大き
 さも大小があつて一定してはいない。周墳には土中に人類や鳥類の形を
 横造した埴輪、円筒などの土器を埋めてゐる。この埴輪(ハニラ)は室
 仁天皇の時代(前二五五)に殉死を禁止せられたと傳へられてゐる。
 し、高は古墳は往昔の住民一様に築造せられたものとさうでは
 ない、高位高官の人や或は地方では豪族などの著名な人にして、その大
 小も権力と金力によつて區別がつかぬものではなかつたかと思はれる。又生
 前に自ら指揮して墓穴をつくつたことも想像せられるのである。大
 規模な古墳として代表的なものは堺市船松町にある仁徳天皇(三七一―三六
)の前方後円式の百舌鳥耳原中の御陵であつて、總面積は四十六万坪、それ
 に三重の堀を築き、上も茶の姥皇帝の陵墓も及ばない立派なものである。
 ジフ上の「ピラミッド」も茶の姥皇帝の陵墓も及ばない立派なものである。
 大体古墳が盛んに築造せられたのは文武天皇(六七二―六八六)以前約七、八百
 年の頃にして、學問上ではこの時代を古墳時代といつてゐる。
 續日本紀によると文武天皇の四年三月十日、僧の道昭が年七十二歳で
 示寂した時遺言によつて茶毘に附して葬られてゐる。又日本紀にも文武
 天皇の大宝二年十一月十七日に持統天皇を以て葬られたと記してある。
 二の年々々五年の後である。和銅元年十一月廿七日の銘がある骨藏器
 を小田郡東三成の下道氏(吉備真備公の祖先)の墓城から、元禄年間に葬
 掘したことがあつた。この骨藏器は銅製にしてその蓋覆の上部に
 (下道臣 國勝とその傍園依朝臣の右二人の母夫人の骨藏器である。故
 に後人は明かなことを知る。よつて破損したり、他へ移轉してはいけ
 ない。時に和銅元年十一月廿七日己酉)。(原漢文)
 と銘記してある。思ふに母夫人とあるは吉備真備の祖母に當るのである。

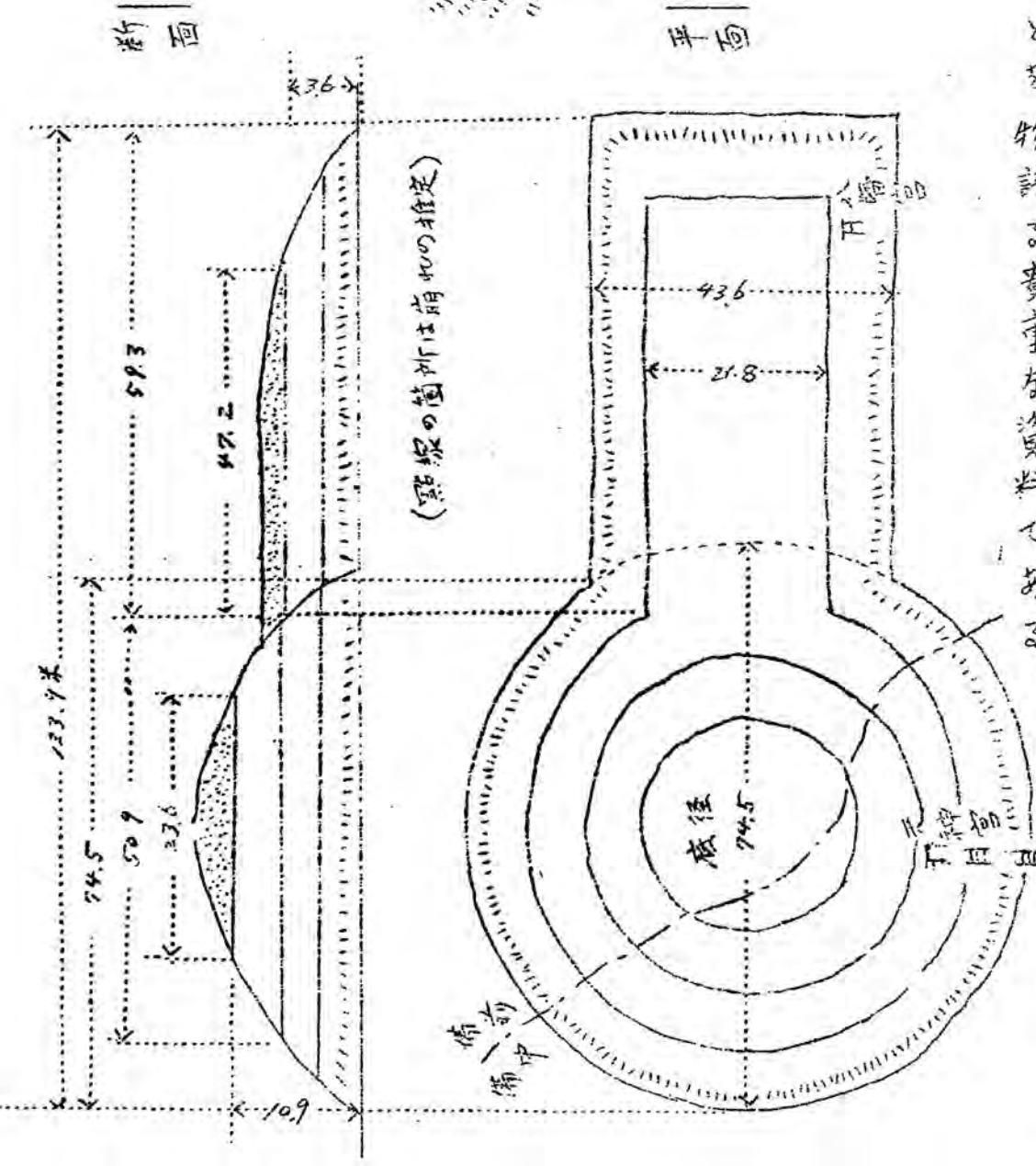
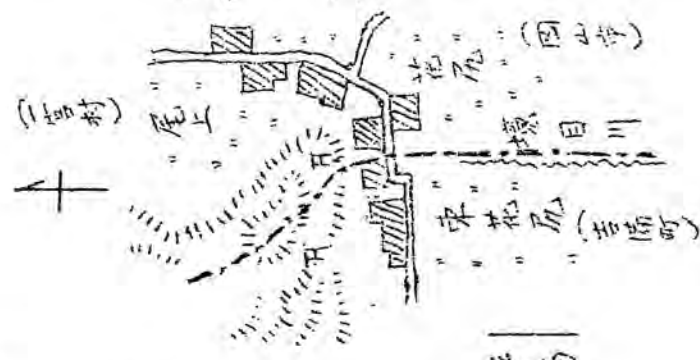
これによつて考へると、すでに和銅年間以前に高位高官の間に大葬が行
 はれていたことが立証せられる。またよりの地方民にも厚はり漸次大
 葬の方式が盛んになり今日に至つたのである。大葬の創められたのは欽
 明天皇時代(五五三)大陸から佛教が始め、我國に傳來して併道によつて葬儀
 が営まれるようになったことである。



(前方後円式古墳は世界に比類のない我國獨特のものである。古墳は古墳
 せられる土器に縄文式と彌生式とがある。縄文式土器は表面に縄目の
 文様をつけてある。この土器の用いられた時代を石器時代といふ人同
 は、漁撈と狩獵を生活のものと見做され、石の住居などに住んでゐた。
 彌生式土器は明治十六年に東京市脚区(彌生町)から始めて発見
 されたのでその名が起つた。この土器は薄青色を帯び、縄文式
 土器よりも焼きが堅く、時代が新しい。この土器の使用せられた
 時代を鉄器時代と名づけられ、すでに石器使用から鉄器の使
 用に及んだてきた。又人間の生活も農耕に轉り、農具や織織り
 具、木製具が発見されてゐる。そして生活上みよりの集落を形成し水
 田の耕作に便利な地が選ばれたようになったのである)

さて天神山の古墳は吉備中山の一角、南東端に突出する東花尻の丘陵に
 ある古墳にして、陵上に菅原道真公を祭祀する天神宮の小祠があるので
 天神山といふ。又車塚とも呼んでゐる。南中、備前の境界にして、後在
 拓かれた今では丘陵上は段々畑になつてゐる。
 陵上に立つて遠望すれば南から東へかけて広漠な田園が展開せられ、
 南は遠くに鳥島津を隔て、鬼島の連峰が見渡され、更に東へ眼を轉ぶと
 と脚下に尾上の久保谷の村落を隔て、岡山市の万成山古城跡に對し、遠
 く御津郡の連峰を指呼の間に觀望し得られる景勝の地である。南山下を

○ 天神山の古墳見取図



る人物を劔葬してゐるなどいふことは確實な史実がないので今更判る筈もなすが、往古部族を統率したこの土地の豪族が永遠に眠る奥城であることは誰れも疑ふ余地はない。吉備所地域に稀にみるこの土木事業が何千年の昔、施設せられたことを物語る貴重な資料である。

是れは全長は一三・九米である。(永山本による)
 現在は方円とも上部は耕作せられて一面に畑地となり、三段になつてゐるが構築當時には二米位は高なつたものではななるうか。
 この古墳の形態を見定めようとする位置は尾上の妙見の北の坂路から眺望するのが最も適当で、前方後円式の姿が明瞭に確認せられるのである。上右この地方には素、漢などの民族が帰化しお着して開墾した土地に於いて彼等の葬法によつて天然の丘陵をそのまま、取り入れて大規模な陵墓工事が行はれたことは言を俟つまでもない。またこの陵に如何なる

一直線に走る境目川は即ち国境線である。花尾の街の傍路に地上高さ一五〇種、二十四種角の石道標がある。銘に「大正九年二月建之 白石村花尾 青年団發起 寄附者 則武始男」
 是より備前花尾 是より備前中 東花尾
 と彫つてある。もとこと古石標の境界石が建てられていたが、昭和十六年頃道路改修によつて取除かれたといふ。上右の地形から判断してこの天神山の古墳は海岸に突出した山の崎であつたろうと思はれる。この古墳は前方後円式にして東を正面にしてゐる。前方部の頂上から南百五十米ばかり南東へ下つた處に八幡宮がある。又後円部の頂上から南百五十米下つた處に前述の天神宮(天満宮とも)がある。これはいづれも後世祭祀したことは勿論であるが、そのためにこの古墳を天神、八幡宮の古墳ともいふてゐる。古墳の構造は

前方部	高さ	三・六米	頂の幅	二一・八米	行	四七・二米
後円部	高さ	四三・六米	頂の径	五九・三米	中径	五〇・九米
	底部の径	七四・五米				

東に隣して、備前の國の笠ヶ瀬川流域は昔津高郡に属して、たもので
 天年十一年(七九)大和の國大守寺伽藍縁起流記資財帳によると
 「津高郡五十町 北美葦原、四至 東 堺江、南 海、西 備中堺。

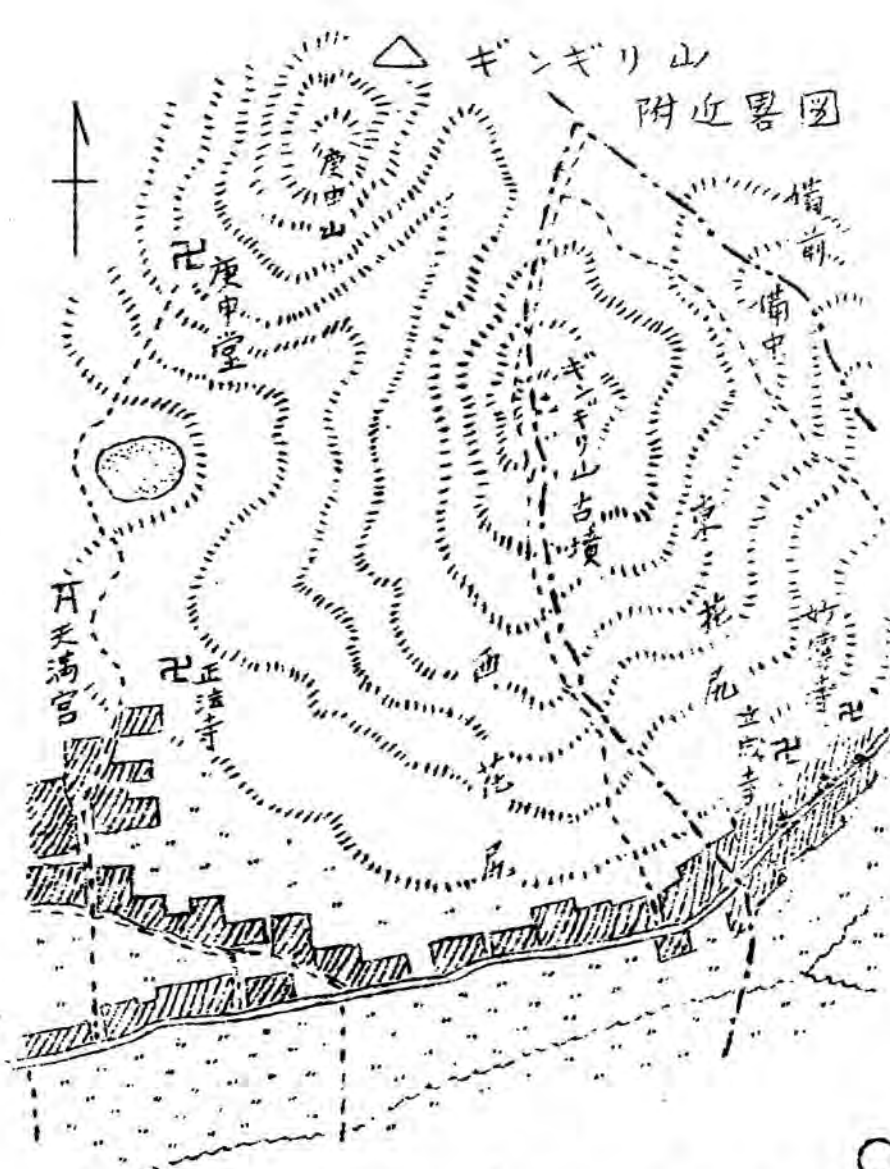
北 山並百性聖田堤之限。
 の古文書がある。この北美の葦原は、いまの岡山市白石村の花尻地内に
 ほぼあるのである。即ち東は笠ヶ瀬川口の界江(カキノイリエ)、西は備中の堺
 南は一帯の海面に瀕み、北は天神山の古墳であつて、平地は百性の聖
 田にして堤防があつて境界になつてゐたのであるが、今はその跡形は全
 然ない。この土地が奈良の大守寺の聖田寺領であつた。大守寺は別名を
 南大寺ともいひ、東大寺、西大寺などに対して呼ばれた古刹で、奈良朝時代
 著名な寺院である。大守寺の寺田はこのほかに笠ヶ瀬川を隔てた御野邸
 (百名)にも五十町歩の聖田を有し、実に大守寺領田を占有してゐたもの
 と考へらる。現に矢坂山の南麓に大守寺といふ地名があるがその名残
 をとどめるものである。

花尻の地名の起りは北美の葦原の山の端であつて、笠ヶ瀬川の河尻に当
 るので、山の端(ハタケ)川の尻から轉じて端尻(ハタケ)となり、やがて花尻の
 文字を用いるようになったのであらう。備中の東花尻、西花尻(百葦時代は板
 倉邸に属した)もこれに關聯して起つた地名である。

天神山の古墳の南、花尻街道を隔てた田圃に平道寺といふ地名があ
 る。往昔ここに平道寺といふ寺坊があつた跡であらうと推定せられる
 が何等の記録も物的証據も見当らぬ。

○ ギンギリ山の古墳
 天神山の古墳より北西に傳える山陵を矢藤治山といふ。山名の起原は
 不明であらうが西花尻と東花尻の境界に上りて頂上に円形の古墳がある。

ギンギリ山の名は山頂が人間の頭部にある旋毛(ツメジ)に似て居り旋毛を指してギ
 リギリといふので、その語源から起り、轉じてギンギリと呼ばれるよう
 になつたのである。この円墳は周囲二百米ばかりにして自然の丘陵を割
 甲してこれに土盛りした古墳である。いまは雑木が繁茂して容易に古墳
 ということは認めがたい。頂上を四平方米ほど掘穿した形跡がある。こ
 れは先年村民が菜掘せんとしてその目的を達せざりしものである。こ
 れは先年村民が菜掘せんとしてその目的を達せざりしものである。こ
 れは先年村民が菜掘せんとしてその目的を達せざりしものである。こ
 族の古墳であらうと推定せられる。

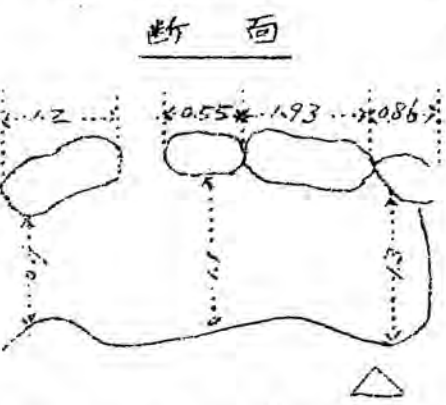
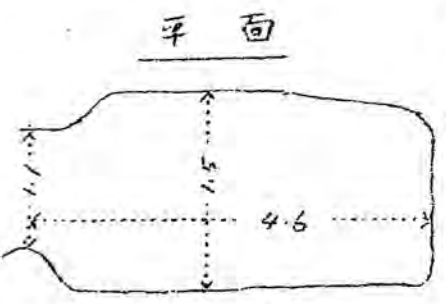
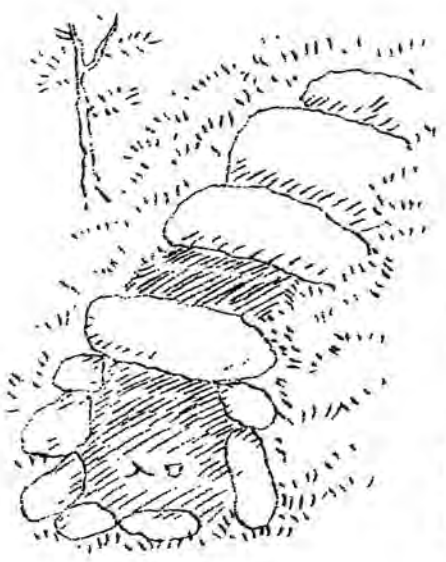


○ 大塚の古墳址

東花尻の大塚靈園の東の
 山麓に横穴式の古墳が
 あつたが、明治三十年頃
 に破壊せられた。石のみに
 残存してゐたが、その
 後花尻街道の改修工事の
 時に擁壁面の石垣に使用
 したため、破壊せられた
 いまは何等の遺蹟もな
 全部竹藪になつてしま
 た。大塚の名の如く、な
 りと規模のちのちであつた
 らしい。

○重太塚址（中うた）
 大塚から北へ数十米、いつた山腹に塚のあとがある。横穴式であつたが、これらも近年全部破壊せられ、家石のみが数個散らして、いたが、大塚と同様他に運ばれて全く古墳の形態を失ひ、あとは雑木林が徒らに繁茂するのみである。

○山神の下の古墳
 東山部、落からななり急坂の新宮谷を昇つた頂上に山の神を祭る一小祠がある。ここにから東南へ数十米下つた中腹の雑木林に包まれた横穴式の古墳が西と東に一基づつ山の斜面を利用して南向に築造せられてゐる。封土は永い年月を経て崩れ落ち、蓋石の巨岩が露出してゐる。
 西の古墳は開口一・一米、高さ〇・九米、奥行四・六米、内郭の高さ一・一米、底幅一・五米の円墳である。天井石は巨岩四枚を置いてゐるが前方の天井石は手前へ斜り天井の一部が崩れ、封土が外部へ流れ込んでいる。入口はもと完全に封鎖されてゐたと思はれる蓋石が人為的に動かされ、下方に轉つてゐる。内郭には割石が敷かれ、石棺はなく、いつの時代か盗掘されたものらしい。



△西の古墳の構造図である。古墳は見取図で奥谷の部落を眼下に望み、遠く見島の連峰が眺望せられ、視野が広い。

東の古墳はこの古墳から十米、いつた所にあつて形造は同じである。上部は天井石三枚にして手前の一枚は入口に横き、内部は土砂の流れで埋つてゐる。周囲は雑木に覆はれ、容易に古墳であることを認めがたい。

○観音下の古墳
 西花尾から岡山県と茨城県へ至る道路の右側、池のある處を左にとつて細道の山路を辿ると数米にして観音下の古墳に達する。この古墳は直径八米の円墳にして横穴式である。内部は往年葬掘せられて居り、家石が数十個散在し、一見して古墳であることは認められる。
 頂上には一小祠がある祭る所は持地、妙正大明神にして本塔は長さ六十三種、幅八種の本札に
 一、千時安政四丁巳歳七月吉日 願主 当邑奥谷信若
 南無妙法蓮華經 奉勸請持地大士 正法寺 廿一在 日口し
 裏面に「持地、妙正大明神」とある。一おわり、二の項未完

ホンダモーター
 サービスステーション
平松モーターズ
 吉備町中田

吉備町 本町
矢尾齒科医院
 吉備局電話一七番